

道徳教育における「道徳」をどうとらえるか

—「道徳」と「倫理」の異同をめぐる考察から—

小 林 秀 樹^{*}

はじめに

学習指導要領の改訂に伴い、小学校では平成30年度から、また中学校では平成31年度から、道徳が「特別な教科」として全面実施されることとなった。それに伴って、従来の道徳教育に対する反省とともに、あらためて道徳教育のあり方が様々に議論されている。特に学習指導要領が「考え、議論する道徳」を唱えたことにより、児童生徒の能動性を重視する「問題解決型」や「アクティブ・ラーニング型」といった教育手法に注目が集まり、心理学や哲学・倫理学の領域からも議論への参入がなされている¹。

しかし、道徳教育をめぐる様々な文献を渉猟していると、あらためて道徳教育とはどのような営みなのか、またそこで問われている「道徳」とは何であるのかという疑問を強くせざるをえない。というのも、各々の論者が「道徳」をどのようなものとしてとらえているかについては必ずしも言及されるわけではなく、各々の論者が論じているはずの「道徳」について、読み手が統一的なイメージを結ぶことが必ずしも容易ではないからだ。

そこで本稿では、「道徳」に対するとらえ方を俯瞰し見通す視点を得るべく、あらためて「道徳」とは何か、その意味内容について、特に「倫理」という言葉や、日本に於ける「倫理学」という翻訳語の成立過程に関する先行研究を通じ考察することにしたい。一般に「道徳」と「倫理」は同義とされるが、実際には西洋の哲学・倫理学の受容過程を通じて、両者の意味合いには相違や隔たりが生じている。しかし、これまでその異同についてはあまり注目されず、十分意識されないまま議論が続けられてきたきらいがある。このことは、道徳教育に関する議論を豊かにしてきた半面、「道徳」（もしくは「倫理」）に対するとらえ方の相違に無自覚なまま、議論が続けられてきた可能性を示唆している。「道徳」と「倫理」という言葉がもつ意味内容の異同を明らかにすることは、道徳教育をめぐるさまざまな議論の立場や前提をより明確にし、「道徳」とは何かという問いについての見通しをもたせることに

^{*}総合福祉学部 准教授

つながるだろう。

そのために本稿では、まず「道德」という言葉に関する一般的な理解を得ることを目的として、辞典等からその語義を確認する。次に「道德」と「倫理」の語義について、その字解や欧米語の語源をたどりながら検討する。その検討からは、「倫理学」という訳語が成立してくる過程で、「倫理」には「道德」と言い換えがきかない「新しい意味」が付与されていったことが示されるだろう。そして、それと対抗または並行する形で、国民の道德的結集を図る目的から「道德」が語り直されるようになったことが示される。最後に、こうした「道德」と「倫理」に関する異同を明らかにすることが、道德教育をめぐる議論にどのような示唆を与えるのか、その見通しを示すことができればと考える。

1. 道德の語義

(1) 「規範」としての側面

まず、考察の手がかりとして一般的な国語辞典²などから現在の語義を確認していくことにしよう。

一般に、道德とは「人のふみ行ふべき道」であり、「ある社会で、その成員の社会に対する、あるいは成員相互間の行為の善悪を判断する基準として、一般に承認されている規範の総体」（広辞苑）とされる。倫理と同義とされるが（広辞苑、明鏡）、道德は「法律のような外面的強制力を伴うものでなく、個人の内面的な原理」（広辞苑）であり、「社会生活の秩序を成り立たせるために、個人が守るべき規範」（明鏡）であるとされる。

理解をより深めるため、「規範」という言葉についても見ておこう。一般に「規範」とは、「手本、模範」（日本国語、広辞苑）といった意味の他に、哲学の用語として「判断・評価・行為などの基準となるもの」（日本国語）、「のっとるべき規則。判断・評価または行為などの拠るべき手本・規準」（広辞苑、明鏡）といった意味もある。先の道德の語義にみえる「規範」についていえば、「社会生活の秩序を成り立たせるために」というところからも、「手本、模範」よりも「基準（規準）・規則」という意味がよりふさわしいだろう。

しかし、道德だけがこうした規範なのではない。「社会規範」という言葉を引くと、「社会生活を営む上で守らなければならないとされている規準。法律、道德、慣習など」（日本国語）とあり、道德が社会規範の一部であり、なおかつ他の慣習や法律などと区別されるものであることがわかる。したがって、道德の語義をより正確に理解するためには、こうした他の社会規範との相違についても確認しておく必要がある。

この相違について、中等教育における参考書などでは次のような点を指摘している。すなわち、道德は「人間のあり方を内面的・精神的に規制する自発的な心の取り決め」であって、「道德の遵守を命じるのは個人の義務感」であること、したがって法律のように「国家

による強制はない」ということである³。そして、その内面的・自発的な規範という性格から、道徳は他の社会規範に対し、最終的に優越するという点も指摘される。例えば、「取り決めは守らねばならない」といった根本的な義務感がなければ、実定法といえども機能しない⁴。どのような規範に従い、どのように行為するかを最終的に決定するのはその人自身であり、その人物の「良心」や「義務感」にかかっているのである。

したがって、道徳が「善悪を判断する基準として、一般に承認されている規範の総体」（広辞苑）であることは間違いないが、同時に道徳は、そうした社会における外在的な諸規範を考慮しつつ、自身の判断・評価・行為を最終的に決する内面的な原理や規範を指すことにもなる。押谷由夫は、道徳に認められるこうした二つの側面を「個人道徳」と「社会（集団）道徳」とに呼び分け、「自己が身につける道徳は、個人道徳と社会道徳とのダイナミズムによって形成される」とものと説いている。押谷の言うように、「道徳について考えるには、個人道徳と社会（集団）道徳の二側面からとらえ、それぞれの内実を把握するとともに、そのダイナミズムを明らかにしていく必要がある」といえるだろう⁵。

（2）「徳」としての側面

さて、ここまでの語釈では、道徳がもっぱら「規範」として捉えられてきた。だが、こうした語釈の他に、道徳の「徳」の側面にも注目し、「道」と「徳」の両面から道徳の語義を説明するものもある。そこで、次にその用例からさらに道徳の語義について考えてみよう。

例えば、日本国語大辞典では、道徳を「人間がそれに従って行為すべき正当な原理（道）と、その原理に従って行為できるように育成された人間の習慣（徳）」というように分けて説明し、道徳は「はじめ慣習、風習、習俗の中に現れるが、人間の批判的な自覚の高まりとともに、慣習や習俗を批判し反省しながら、慣習から分化した精神的規範や規準として現れる」とものと説明している。

この説明においては、前半部分で道徳が「それに従って行為すべき正当な原理（道）」と「その原理に従って行為できるように育成された人間の習慣（徳）」とに分けて説かれているという点、また後半部分では、それらが慣習から生じてくるとされている点に注目すべきである。

一般に徳とは、「道をさとった立派な行為。善い行いをする性格。身についた品性」（広辞苑）であり、「修養によって身につけた、すぐれた品性や人格」（明鏡国語辞典）とされる。このような徳の語義をも加味するなら、道徳の語義を外在的な社会規範とだけとらえたり、個人の内面的な規範、すなわち「基準（規準）や規則」とだけとらえたりするのは、不十分ということになるだろう。「道徳」は、自らの振る舞いを決し、また評価するための原理や規則の体系を意味するだけでなく、その原理に外れずに振る舞う習慣性や、そうした振る舞い

を志向する傾向性ともいうべき「品性や人格」をも意味しているからである。

もちろん、「すぐれた品性や人格」というものが社会において推奨され、「そうあるべき」もしくは「そうあれば望ましい」ものとして、規範的・理想的に語られることは多い。こうした「すぐれた品性や人格」を分類した名称は「徳目」と呼ばれるが、こうした徳目もまた、社会における一つの規範（ただし、「手本、模範」という意味での規範）であると言える。したがって、そのように考えるなら、道德の定義としては、「徳」の側面も含めて「人のふみおこなうべき道」、「行為の善悪を判断する基準として、一般に承認されている規範の総体」という表現に収まるかもしれない。しかし、今述べたように「規範」の意味を広くとる「道德」の理解は、「徳」の側面を通じてはじめて見えてくるものだろう。

もっぱら道德や倫理というと「善悪を判断する基準」、「秩序を成り立たせるために守るべき規範」という意味合いで理解されがちである。そして、その教育とは、その基準や規範を教え込むことと理解されることも多い。しかし、道德教育が扱う「道德」の中身について考えるうえでは、道德の「徳」の側面を忘れてはならない。辞典的な定義をよく確認してみると、道德は「道」と「徳」という二つの側面からとらえられるのであり、道德教育について考えるうえでは、双方の意味をきちんと押さえておくことが重要となるのである。

2. 同義とされる「道德」と「倫理」

ここまで道德の語義について、一般的な辞書をもとに確認してきた。ここで、さらに道德教育における「道德」について考えていくうえで、重要な関わりをもつ倫理という語についても検討しておくこととしたい。

倫理については、例えば、広辞苑に「①人倫の道。実際道德の規範となる原理。道德」（広辞苑）とある通り道德と同義とされる。この点については、先にも言及したとおりである。この両者が同義であることについては、道德教育に関する概説書等において、倫理の字義に関する説明が、さらには欧米語の語源に関する説明が、その根拠として取り上げられることが多い。それぞれの説明について、次に確認しておこう。

例えば、『新漢語林』によれば、倫の字義として「人のふみ守るべき道」「すじみち。道理」があり、また「ともがら。なかま。たぐい」が挙げられている。また、理については、「おさめる」という意味の他、「きめ。すじ」、「ことわり。道理」、「みち。人の従うべき道。道義」などが挙げられている。白川静の『新訂 字統』によれば、倫のつくりである侖は、「相次第して、全体として一つの秩序をなすもの」をいい、「倫は人倫・父子・兄弟・夫婦など不可分のもので、相対を合一して一となるものをいう」とされる。また、理については、「玉に文理があり、磨いてそれをあらわすことをいう」とあり、「またすべて条理のあることをいい、地にも山川の文があるので、天文に対して地理という」とある。すなわち、天や地

にも理があるように「倫」にも理があり、それが「人のふみ行ふべき道」として、道徳と同義ということになるのである⁶。

また、道徳と倫理が同義であることは、それらに相当する近代ヨーロッパ語の語源が、ギリシア語のエートス *ēthos* やエトス *ethos*、またラテン語のモス *mos*（複数形モレス *mores*）に同根であることを根拠としても説明される。

たとえば「倫理学」と訳される *ethics*（英）、*Ethik*（独）、*éthique*（仏）は、「住み慣れた場所」、「慣習・習俗」、「性格」、「品性」などを意味するギリシア語のエートス *ēthos*（複数形 *ēthē*）に由来するとされる。これは、アリストテレスが「倫理的性状」「倫理性」とも訳されるエートス *ēthos* を「習慣」「習慣づけ」を意味するエトス *ethos* によって身につくものとして論じ⁷、その内容が後にエーティカ *ēthika*「倫理学」と称されるようになったことにもとづいている。

また、*morality*（英）、*moral*（英）や *Moralität*（独）、*Moral*（独）、さらに *morale*（仏）などについては、その語源がラテン語のモラリス *moralis* とされ、この言葉がエトス *ethos* とほぼ同義をもつラテン語モス *mos* の複数形モレス *mores* に由来することから、それらの欧米語は、やはりギリシア語のエトスに由来する同根の語と説明されるのである。

このように *ethics* と *moral* は、「習慣」を意味するギリシア語（およびラテン語）を語源とする言葉であり、道徳も倫理も共同体を共同体たらしめている慣習・習俗に発し、それによって作り上げられる性格や人柄、また内面的規範を意味するものと説明されるのである。

しかし、道徳や倫理という言葉の用例について改めて検討した場合、両者に意味上の相違がないと本当にいえるだろうか。例えば、「政治倫理」や「企業倫理」、「生命倫理」や「工学倫理」などの用法において、「倫理」の部分「道徳」に置き換えたとしてみよう。果たしてそうした用法は通用するだろうか。そこには、やはりニュアンスの相違があるのではないか⁸。個人的な印象では、道徳が「個人の内面的な原理」「個人が守るべき規範」として、行為主体をもっぱら強く意識させて用いられるのに対し、「倫理」はその「規範」が通用している集団や社会を念頭に、どちらかといえば外在的な社会規範を意味する際に用いられるように思われる。道徳教育における「道徳」がどのようなものかを考察していくうえで、こうした相違を明らかにしておくことは重要だろう。

こうした相違の淵源を、私たちはどこにたどることができるだろうか。ここで重視したいのは、「倫理」には「②倫理学の略」（広辞苑他）という意味もあるという点である。ここで「倫理学の略」という語義を重視するのは、「倫理学」が、欧米の外来語に対して明治期にあてられた翻訳語であるからであり、その学が形成され成立する過程において、その対象であるはずの「倫理」や「道徳」もまた、あらためてその何たるかが検討に付されているためである。

そこで、次節では、「倫理学」という表記をめぐる歴史的研究について検討することにしよう。

3. 「倫理学」という訳語

この主題に関わる先駆的研究の一つとして、1951年になされた佐々木英夫による「倫理という云ふ文字の歴史的研究」がある⁹。佐々木はまず「倫理学の意義に用いられた文字」として、英語とドイツ語、さらにそれらの翻訳語として用いられていた日本語を挙げ¹⁰、原語や翻訳語の用例を歴史的にたどっている。

佐々木は、まずethicsやEthikがアリストテレスの『ニコマコス倫理学』に由来することを指摘しつつ、18世紀のドイツではEthikの文字は用いられていなかったこと、ショーペンハウエルの*Die beiden Grundprobleme der Ethik*（1841）においてはじめて用いられたこと、また、道徳に関する学問を指す言葉として多くの学者がEthikを用いるようになったのは、19世紀後半になってからであることを指摘している。さらに、イギリスでも18世紀後期には、今日の倫理学はMoral Philosophy道徳哲学と呼ばれていたとし、おおよそethicsが用いられるようになるのは、1860年代ごろからであるとしている¹¹。

以上の確認を経たうえで佐々木は、「然らば今日の倫理學と云ふ文字は何時頃から用ゐられたか」について報告している。佐々木は、①米国ブラウン大学のフランシス・ウェーランドFrancis Wayland（1796-1865）による*Elements of Moral Science*（1835）の翻訳¹²として、1875（明治8）年6月の平野久太郎訳『修身学』などを挙げ、少なくとも明治6年ごろまでは「倫理学」の代わりに「修身学」が用いられていたこと、②明治14年の井上哲次郎による『哲学字彙』において、「倫理学」が訳語として確認できることを指摘している。そのうえで佐々木は、「之を要するに、“Ethics”と云ふ文字の譯は既に明治六年に脩身學であり十四年には倫理學となり、現今では中國の字典にも倫理學を用ゐてゐるので、今日では東洋一般の共通語となつたと云つてよからう」と述べている。

このように佐々木は、もっぱら“Ethics”とその訳語としての「倫理学」の登場に焦点をあてて報告しているが、佐々木自身が挙げていたような他の欧米語を含め、その訳語をめぐっては、明治20年代の後半に至るまでもっと混沌とした事情がある。「道徳」や「倫理」といった用語の成立に関わる他の先行研究を参考にまとめるなら¹³、ethicsには「名教学」「倫理学」¹⁴「彝倫学」「倫常の道、または修徳の道」「人道の学、また修徳の学」「道徳學、修身學」などの訳語が、またmoralについては、名詞として「倫常の学」「修身」「道徳」、形容詞としては「正經の」「徳義の」「善惡の」などの訳語があり、さらにmoral philosophyの用例に「倫理学」の訳語が当てられている例までであるのである。

このように、実際には明治14年の『哲学字彙』の後も訳語は揺れているのであり、現在のようにethic(s)を「倫理（もしくは倫理学）」、moral(s)を「道徳」と訳し分けるようになるには何らかの事情があったことがうかがえる。両者の間にある何らかの異同を明らかにしようとするのであれば、この間の経緯を探る必要があるだろう。実際、「道徳」と「倫理」

の両者が現在のように用いられるようになる過程には、「倫理学」という概念の成立が関与しており、それと並行して、そこには「道徳」や「倫理」という概念が、新たな意味を獲得しながら成立してくる事情がある。そこで次節以降では、「倫理（学）」概念の形成に関する二つの先行研究、すなわち久野昭と子安宣邦による先行研究を順に取り上げ、近代日本における「倫理（学）」概念の成立と、それに伴って生じる「道徳」と「倫理」の間の乖離についてみていくことにしよう。

4. 「倫理学」概念の形成

(1) 久野昭『倫理学の概念と形成』（1977）から

久野によれば「私たちの国で倫理学という用語が登場するのは、EthicsないしはMoral philosophyあるいはEthical philosophyの訳語としてである」（久野、前掲書、p.5）という。しかし、この「倫理学という用語」の「登場」は、より大きな意味を持っている。久野の言葉を引用しよう。

倫理という言葉は、中国語から、かなり早く、日本に入ってきた。しかし、倫理学という言葉は、逆に、日本語から、中国語に入っていくのである。しかも、古漢語から日本に入ってきた倫理にしても、近代日本で、いわば、新しい意味を与えられて、逆に、日本来源として、現代中国語に入りこんでいく。（久野、前掲書、p.5）

久野のいう「倫理学という用語」の「登場」とは、「倫理学」という学問領域がアカデミズムにおいてその地位を確立することと等しい。そして、以降「倫理学」は中国に逆輸入され、先の佐々木の発言も加味するなら、さらに東洋へと普及していくのである。そして、それに伴って「倫理」もまた「新しい意味」を与えられ、現代の中国語に逆輸入されていく。本稿との関連でいうなら、ここでの「新しい意味」が重要となる。果たしてこの「新しい意味」とはどのようなことであろうか。

久野は、「倫理学」とはどのような学問であるのかについて「倫」および「理」の字解を尋ねつつも、西周が「フィロソフィー」を現象の背後にあって「顕然たらざる者」である「理」を探究する学、すなわち「理学」と訳したことを念頭におく。そして、そのうえで倫理学を「倫の理の学として」（久野、前掲書、p.5）、すなわち「哲学の一環」としてとらえる。

いま問題なのは、明治になって哲学の一環として日本に根を下ろそうとする倫理学の、学的対象としての倫理である。古くからあった倫理という言葉に、近代日本における倫理学の成立過程のなかで、いわば、新しい意味が、もられていく。（久野、前掲書、p.16）

ここでも重要なのは「新しい意味」であるが、それを明らかにするためには、「古くからあった倫理」を明らかにする必要がある。そこで久野は、「倫理学」の名を冠した著作がしきりに出始める明治20年代から30年代より以前、「それ以前のところで『倫理』がどうとらえられていたか」を検討しようとする。そして、そのための例として、明治16年の井上哲次郎の『倫理新説』を取り上げ、井上がその緒言で挙げている「倫理ヲ講ズル法二種」に着目する。

井上によれば、倫理を講ずる仕方には二種類がある。「第一ハ倫理ヲ以テ人ノ当ニ守ルベキ紀律トシテ、絶エテ其根底ヲ論ゼザル」ものであり、「第二ハ倫理ヲ以テ天地間一種ノ現象トシテ、其根底ノ有無如何ヲ論ズル」ものである。久野は井上が挙げている二つの論じ方について、「第一の法とは、いわば、倫の立場」であるとし、「第二の法にいたって、倫の理が問われる」とした。井上の『倫理新説』は、後者の立場において、「道徳ノ基址」、井上の別の表現でいえば「倫理ノ大本大源」を論ずるものであったが、久野はこの倫の理を問う「第二の法」にこそ、「倫理学」たるゆえんを見ているのである。

ここで久野が考えている以前の「倫理」とは、「倫の立場」において、すなわち「倫」の秩序たる既存の紀律を前提とし、その根底については論じないという立場で講じられるものに他ならない。別の個所で久野は、「倫と倫理は、区別されねばならない」と述べているが、「倫理」という漢語が意味するものについて、久野は「現実にかくあった、あるいは、かくある倫」としてではなく、「倫の理として、倫をして倫たらしめている」ものととらえている¹⁵。久野は、井上が「倫の立場」に対置した「倫理ノ大本大源」を講ずる仕方こそ、「倫の理」を問う「倫理学」であると考えているのである。

続いて久野は、「倫理学」を「規範学」としてとらえる大西祝（1864－1900）の論を紹介しつつ、「近代日本において倫理学らしい倫理学が出てきたのは、おそらく、大西祝からだ」（久野、前掲書、p.25）との持論を述べている¹⁶。久野はその後の論述で、この大西の著作である『倫理学』¹⁷第一章第五節全体を「倫理学の定義」という表題をつけて引用するなど、大西に依拠しつつ「倫の理の学」としての「倫理学」の概念を論じている。

大西はどのように「倫理学」を規定しているだろうか。その概要を『倫理学』の第一章第一節から第六節までを中心にまとめるなら、およそ以下のようなになるだろう。

人々が相集まって社会を形成するところには、その社会の組織に道徳的觀念が宿っている。個々人は、その社会の共有物となっている道徳的觀念に養われて、善悪正邪の区別の何たるかを知るのである。このとき、道徳的觀念はどのように知られるか。それは、社会の制度、法律、慣習、風儀から知られるのである。これらのうちには、道徳的判別が客觀的事実となっているが、個々人は、まずこの事実を認識し、これに表れている道徳的觀念を受け入

れることで、自らの規範とするのである。こうした善悪正邪、為すべきことと為すべからざることとの区別、義務という観念など、我々の道徳的意識を常識から問い、また常識に問い返すことによってその観念を明瞭にすること、それが倫理学の務めである。したがって、倫理学は我々の道徳的意識の全体を究明することとなるが、それは道徳的判別を行為および品性との関わりのうちに考究することである。そして、その道徳的判別の善し悪しを論ずるための標準を立てること、したがって道徳行為の規範を究明し示すことこそ、倫理学の本領とすべきものである。

かくして久野によれば「倫理学は、規範学であって、習慣学ではない」（久野、前掲書、p.27）ものとされる。そして、「倫理」という言葉には、これに伴って「倫理学」によってとらえられる学的対象としての意味が付加されることになった。すなわち、従来の「倫」における秩序という意味だけでなく、その「倫」を「倫」たらしめている「理」、すなわち必ずしも顕わにはなっていない善悪正邪等の道徳的観念やその判別の基準、またその考究の結果として、我々に「なすべし」と迫ってくる行為の規範という意味が、付加されることとなったのである。本稿では、かくして「倫理」に盛られることとなった以上のような「新しい意味」の側面を、総括して「学的対象としての意味」と呼ぶこととしたい。

さて、「倫理」という言葉の意味が持つ新たな側面について論じてきたが、こうした「倫理」という語義の拡大は、「道徳」の意味にどのような関わりを生んでいくのだろうか。大西は先の『倫理学』の中で、「倫理学」がやはりギリシャ語のエートスに由来すること、また、ラテン語のモスが、エートスとの関わりが指摘されるエトスと同義であり、「道徳的」という意味に使用するモラーリスの語源とされること、そのため「倫理学」に対して「道徳学（*philosophia moralis*）」という名称もあることを述べている。そのうえで、「倫理的といひ道徳的といふ語は相代へ用ゐるも不可なし若し仮りに其の間に区別を為さば前者は後者よりも学理的の意味を含めりといふも可ならん歟」¹⁸と述べている。この記述からは、大西において「倫理的」という用語には独自の意味が見て取られているものの、両者はまだ言い換えても問題ないものとして捉えられていることが理解されよう。この乖離がより一層はつきりするのは、明治日本が近代国家として形成されていく課題として、国民の道徳的結集が求められていくところにおいてである。次節では、やはり「倫理学」概念の形成について論じている子安宣邦による先行研究に依拠して、「道徳」と「倫理」の意味についてさらに検討することにしよう。

（2）子安宣邦『近代「倫理」概念の成立とその行方—漢字論・不可避の他者—』（2000）から

子安は、国語学者の森岡健二による近代漢語の成立事情に関する研究を踏まえたうえで、「倫理学」および「倫理」という用語について次のように述べている。

「倫理学」という用語は「形而上学」などとともに「再生・転用」による新漢語の成立例として挙げられている。「再生・転用」とは森岡によれば、すでに古語・廃語となった過去の言葉を、そのまま再生したり、あるいは新しい意味に転用したりして復活させる場合のことをいうとされる。「倫理」「倫理学」とはそのように新しい意味をになって明治の日本に復活した漢語語彙である。それらは訳語として再生し、復活された漢語語彙であり、基本的には新たに構成された語彙とみなすべきものである。（子安、前掲書、p.5）

久野と同様、子安もまた「倫理学」および「倫理」の漢語が、翻訳語の成立とともに新しい意味をとまって成立してくると考える。「倫理学」の語は古く用いられていた儒家用語「倫理」にもとづきながら、しかしEthicsの新訳語として登場するのである。

子安が久野と相違するのは、その新訳語成立の契機をもっぱら大西祝にではなく、『哲学字彙』を編纂した井上哲次郎（1855－1944）に見ている点である。子安は、明治16（1883）年に公刊された井上の『倫理新説』を取り上げながら、近代日本の新たに編成されたアカデミズムにおいて、井上には「倫理の大本」を講究し、新たに「倫理学」を立ち上げるという課題があったと考える。それは、東京帝国大学哲学科における日本人最初の哲学教授であった井上にとって、「倫理学」を学として構築する上で要請される課題であった。

この後の本稿にとっても重要であることは、「井上らにとってまず課題として存在したのは『倫理問題』ではなくして『倫理学問題』であった」（子安、前掲書、p.7）という点である。つまり、井上らは実社会の倫理上の問題に対し、何らかの主張を展開する必要から「倫理の大本」を尋ねることになったのではない。子安は次のように述べている。「倫理の実践的な主張なり、倫理の社会的な提示の志向なりが、その基礎付けを『倫理の大本』の究明として彼に要請しているのではないのだ。理論上の要請としての『倫理の大本』の究明がまずもって井上に課題としてあるのである」（子安、前掲書、p.7）。このように、明治の哲学士らにとって問題であったのは、「倫理問題」ではなく「倫理学問題」であり、それは「ヨーロッパ倫理学（Ethics）の問題構成にしたがって新日本の学術的言説を、あるいは教育学的言説を再編成する問題」（子安、前掲書、p.8）に他ならなかった。

子安は、さらに明治20（1887）年刊行の井上円了（1858－1919）による『倫理通論』における倫理学の定義を引きながら、これを「エシックス」に対する訳語が「倫理学」でなけれ

ばならなかった理由を開示するものとして論じている。重要な個所となるので子安が引用している個所を確認しておく。

倫理学とは西洋の語にして「エシックス」と称し、或は「モラル・フィロソヒー」又は「モラル・サイエンス」と称するものは是れなり。近頃此の語を訳するに道德学・道義学・修身学等の名称を用ふるものあれども、余は特に倫理学の名称を用ふるなり。抑倫理学即ち「エシックス」は善悪の標準、道德の規則を論定して、人の行為挙動を命令する学問を云ふ。而して余が爰に論定すると題したるは、論理上考定究明するを義とし、假定憶想に出づるを義とするにあらず¹⁹。

子安によれば円了が「假定憶想に出づる」ものとしたのは「孔孟の修身の学」である。すなわち先の引用において円了は、「假定憶想」にもとづく修身の教説を斥け、道德的行為の規範を「論理上考定究明する」ことこそ「エシックス」であるとした。そして「倫理学」という訳語の採用は、そうした問題構成の採用を意味していたと子安は考えるのである。したがって、「新訳語『倫理学』の成立とは、既存の伝統的な道德的教説の否定的な評価の上になされる新たな倫理学的言説の優越的な構築」（子安、前掲書、p.9）と解されるのである。

5. 「道德」と「倫理（学）」の乖離

さて、こうした「倫理学」「倫理」概念の成立は、「道德」にどのような影響をもたらしただろうか。引き続き子安に依拠しながらそのことを見ていこう。ここで重要なのが「倫理問題」とは常に「派生的な二次的な問題」でしかなかったということであり、「まさしく新たな『倫理学』から新たな『倫理問題』は言説的に編成されてくる」（子安、前掲書、p.9）ということである。

これはどのようなことか。子安は円了が『倫理適要』の巻末に挙げている「試験問題」を取り上げ、「倫理学」が問う「倫理問題」が、あくまでも倫理学の構成を踏まえて提示されるものでしかなかったことを指摘する。『倫理摘要』は倫理学の教科書というべき書物であるが、巻末に本文の理解を確認するための問題が付されていた。例えば、「倫理學の定義如何」から始まり、「善悪の標準とは如何」、「良心とは何ぞや」など148の問いが立てられている²⁰。子安はこのような「倫理学」からの「倫理問題」を「派生的な二次的な問題」でしかなかったと捉えているのであり、「現実の社会に生起する倫理的、道德的諸問題を『倫理学』が引き受け、それへの応答を通じて自らの学的あり方をも問いただそうとしていくようなことは行われなし、行われるようなことはなかった」（子安、前掲書、p.9）と指摘する。つまり、このような「倫理問題」は、現実の「倫」、すなわち当時のエトスやエートス（ある

いはモス（モレス）に足場をおいたものでは必ずしもなかったものであり、「倫理学」の成立に伴って「学的対象としての意味」を担っていく「倫理」は、それゆえ伝統的な「道徳」から乖離していく側面を有していたのである。

では、このころの「道徳」はどうであったか。子安は、先のような日本の近代概念「倫理学」がその成立から負っているこの抽象性を衝く形で、「『日本道徳』の国民的な形成の主張が『倫理学』の成立とほとんど同時に起こってくるのはけだし当然の成り行きである」（子安、前掲書、pp.9-10）とし、西村茂樹（1828-1902）による「日本道徳論」の講演（1886（明治19）年12月）に論及している。この講演で西村は、明治維新という近代化とともに生じた日本の道徳的空白状況を危惧し、国民としての道徳的結集を可能にするような「日本國の道徳の標準」、「公共の教え」の必要性を説いている²¹。西村は道徳を説く仕方として道理を主とする「世教」と信仰を主とする「世外教（宗教）」とを隔てるが、そのうえで西村は東西の「世教」すなわち「儒道」と「西国の哲学」とを折衷した教説を国民道徳として採用する必要を説くのである。

「道徳の標準」の必要性を西村は説いているが、これはあくまでも「公共の教え」であって、その教えに前提とされている道徳的判別の基準そのものを問題にするということではない。それはありうべき新たな「倫」を問うものではあっても、抽象的に「倫」の「理」を論究するものではない。子安によれば、「『倫理学（Ethics）』から導かれる『倫理（ethics）』の教説とは、『こうすることは良いことなのか、悪いことなのか。正しいことなのか、間違いなのか』という各人の行為規範にかかわる教説」（子安、前掲書、p.11）でしかない。そのような「倫理学」は、「国家的要請に応じて国民の道徳的結合を可能にする教説を直ちに構成するような学的な性格をさしあたってはもっていない」（子安、前掲書、p.11）のである。そのために、「国家的要請に応じて国民道徳の確立を求める西村茂樹は、『倫理学』の教説を差し置いて、儒家的な伝統的教説を近代国民国家の要請に応える形で再構成していこうとする」（子安、前掲書、p.11）のである。ここに我々は「倫理」と「道徳」の乖離をより明確に見て取ることができるだろう。

子安は「『倫理学』と『国民道徳論』の形成とは近代日本の講壇倫理学者が負わなければならない二つの課題となっていく」（子安、前掲書、p.12）と述べている。そして、そのうえで子安は、「倫理」概念が儒教的伝統の側に取り返されていくことを、明治21（1888）年の野中準『日本道徳原論』に見出している。また、こうした「儒教的保守主義による『倫理（ethics）』に対抗する『倫理（人倫の道）』概念の再生的成立」を「『倫理学（Ethics）』に対抗する新たな『倫理学』の形成を示唆するもの」と見なし、その新たな体系的成立を和辻哲郎に見ていくのである²²。

その詳細を追うことは、本稿を超える課題であろう。周知のように修身教育²³は、徳育論

争を経て教育勅語へとつながり、戦後の道徳教育批判へとつながっているが、これもまた別の課題である。本稿では、道徳教育における「道徳」とは何かを明らかにすることを目指してきたが、最後にこれまでの「道徳」と「倫理」の意味や概念をめぐる検討が、何を明らかにしたのかを示しておくことにしよう。

結語にかえて―「道徳」をとらえるための視点とは―

本稿では、道徳教育をめぐる議論や、その際に論じられている「道徳」に対するとらえ方を俯瞰し見通す視点を得るべく、「道徳」と「倫理」という言葉がもつ意味の重なりとずれについて、先行研究をもとに考察を行ってきた。その考察の結果、明らかになったのは次のことである。

「道徳」と「倫理」という言葉は、現在の辞書的定義では同義とされている。また、欧米語の語源を尋ねても同根であり、明治期にそれらが翻訳された際の訳語を見ても、相互にほぼ相違のない翻訳語として用いられていた経緯をもつ。しかし、エシックスの翻訳語として新たに「倫理学」が成立してくる過程を子細に見れば、その過程において「倫理」は新たに「学的対象としての意味」を担うようになり、それゆえ現実の「倫」、すなわち伝統的・实际的な「道徳」から乖離していく側面を有することとなった。また、その一方で国民としての道徳的結集が求められるようになると、「道徳」の方は、もっぱら「国民道徳」として説かれるようになっていったということである。

子安が論じているように、その後、儒教的保守主義による「倫理（人倫の道）」概念の再生的成立や、和辻による『『倫理学（Ethics）』に対抗する新たな『倫理学』の形成』など、儒教倫理復活の動きや「倫理学」の側からの統合の動きはあった。しかし、「倫理学」概念の成立に伴って生じた「道徳」と「倫理」という言葉が指示する意味内容における異同は、それらの用法に現在もおお痕跡を残しているのではないか。それはすでに確認したように、「道徳」の辞典的定義が、もっぱら「規範」という言葉によって説かれるものと徳の側面をも踏まえたものとに揺れていたところや、「道徳」と「倫理」の言い換えが困難なケースにもうかがえるように思われる。「道徳」を「規範の総体」とするとらえ方や、「道徳」と言い換えが困難な「〇〇倫理」という用法は、むしろ規範学としてのエシックスの視点を色濃く反映しているのではないだろうか²⁴。

さて、最後にこれまでの考察が、道徳教育をめぐる議論にどのような見通しをもたらすかについて述べることにしよう。道徳教育をめぐる議論においては、本稿で述べたような「道徳」と「倫理」の異同を注意深く意識しながら、論者が行っている主張をとらえる必要が生じるだろう。道徳教育をめぐる議論においては、明に暗に「道徳とは何か」という問いかけが生じているが、議論の対象となる「道徳」については、実際に児童生徒が生活する場、す

なわちエトス (住み慣れた場所) やモス (習慣慣習) に立脚して論じられる必要があるからだ。ところが、本稿で述べてきたような「道徳」と「倫理」の異同に関する注意を欠くなら、「道徳とは何か」という問いやその問いをめぐる議論は、容易に「倫理学」的な問いかけへと変質し、エトスやモスを離れていきかねない²⁵。

道徳教育やその「道徳」をめぐる議論においては、常にその隔たりに自覚的に、議論に関与していく必要がある。その具体的論究については、今後稿を改めて論じていきたい。

注

- 1 例えば、前者に関しては、諸富祥彦『「問題解決学習」と心理学的「体験学習」による新しい道徳授業 エンカウンター、モラルスキル、問題解決学習など「理論のある面白い道徳授業」の提案』図書文化社、2015などが、後者に関しては、河野哲也『道徳を問い直す—リベラリズムと教育のゆくえ』筑摩書房、2011などが挙げられる。
- 2 使用した以下の辞典については、本文中に () 内の略語で引用元を示すこととする。
『精選版 日本国語大辞典』小学館 (日本国語)
『広辞苑』第六版、岩波書店 (広辞苑)
『明鏡国語辞典』第二版、大修館書店 (明鏡)
- 3 藤井剛『第2版 詳説 政治・経済研究』山川出版社、2010、p.7.
- 4 藤井の前掲書参照。この問題は、「道徳」や「倫理」といわれるものを考察するうえで重要である。前掲書の他に、例えば永井均『子どもための哲学対話』講談社、1997を参照。
- 5 押谷由夫『道徳教育の理念と実践』一般社団法人 放送大学教育振興会、2016、p.13.
- 6 道徳という語を構成する「道」と「徳」の字義についても明らかにしておく。同様に、白川静の『新訂 字統』によれば、「道」とは「首を手 (又) に携えて行く意で、おそらく異族の首を携えて、外に通ずる道を進むこと。すなわち除道 (道を祓い清めること) の行為をいうものであろう」とあり、「このようにして啓かれたものが道であり、人の安んじて行くところであるから、人の行為するところを道といい、道徳・道理の意となり、その術を道術・道法といい、存在の根源にあるところの唯一者を道という」とされる。また、「徳」については、その初形が省と極めて近いことが指摘され、「省は目の上に呪飾をつけて、省道すなわち除道を行うことを意味する字で、徳とはその省道によって示された呪的な威力をいう」とされる。そして「そのような威力が、呪飾による一時的なものでなく、その人に固有の内在的なものであることが自覚されるに及んで、それは徳となる」とされている。しかし、「倫理」の字解を通じた説明が人口に膾炙しているのに比べ、「道徳」について同様の説明がなされることは多くない。管見では、道徳教育の概説書において「道」と「徳」の字義に触れて「道徳」の意味について論じているものに、押谷の前掲書がある (押谷、前掲書、p.12)。「道徳」の説明が、「倫理」を迂回してなされる現状については検討の余地があるだろう。
- しかし、千徳廣史によれば、そもそも「漢語としての道徳は、最初から道徳と、道と徳が連用されていたのではない」とされる。道家には道家の、儒家には儒家の「道」と「徳」とのとりえ方があり、「これが道徳と連用されるのは、儒家も道家もその本来の使われ方ではない」のだという。こうした指摘を踏まえるなら、中国思想の文脈において (さらには日本思想の文脈においても) 「道徳」や「倫理」がもつ意味を探ることが本来は必要であろう。千徳廣史「道徳教育の「もと」としての道徳」 (『道徳教育論集』第13号、日本道徳基礎教育学会、2016所収) を参照。
- 7 アリストテレスにおける訳語については、高田三郎訳、アリストテレス『ニコマコス倫理学 (上)』岩波書店、1971、pp.54-55に従っている。
- 8 この点を指摘したものとして、赤林朗『入門・医療倫理Ⅰ』勁草書房、2005、p.94参照。赤林は、道徳を「個人道徳」、倫理を「社会道徳」とも言い換えている。
- 9 佐々木英夫「倫理という云ふ文字の歴史的研究」『日本大文学部研究年報』第一輯 (復刊號)、

日本大學文學部, 1951年, pp.45-62.

- 10 佐々木が挙げている原語および原語に相当する日本語訳は、以下のとおりである。

英語

Ethics, Practical Philosophy,
Moral Philosophy, Moral Science,
Ethical Philosophy

ドイツ語

Ethik, Praktische Philosophie,
Moral Philosophie, Sittenlehre,
Metaphysik der Sitten, Moral Wissenschaft

日本語

倫理学 道德哲学 実践哲学 倫理哲学 道德学 道義学 修身学

- 11 ここでは欧米語からの翻訳を問題としているので、佐々木が報告している東洋の事情については割愛した。

佐々木は東洋における事情について、「倫理」の由来を『禮記』におきつつ、さらに漢籍から用例を挙げ、「倫理とは父子夫婦兄弟の間、卑尊内外長幼の筋道あることを云ふ」としている。そして「假令倫理の出典は禮記の樂記にあつたとしても、今日の倫理學に用ゐる所の實踐道德の意味に用ゐられたのは、朱子を中心とする宋代に在りと云はれなければならない」としている。また、日本における「倫理」の用例としては、『先哲叢談後編』（1827）における用例の一つ挙げている。『先哲叢談』は儒者の伝記集とも言ふべき書物であるが、朱子学（儒学）を受容し展開していく日本の倫理思想の伝統において「倫理」の用例を示すものだろう。

- 12 管見であるが、国立国会図書館近代デジタルライブラリーによれば、この著については年代順に以下の翻訳が確認できる。なお、本稿では、著者である Francis Wayland の表記を「フランシス・ウェーランド」とした。

1873（明治6）年6月 山本義俊訳『泰西修身論』

1873（明治6）年10月 保田久成訳『修身学初歩』三報社

1874（明治7）年12月 阿部泰蔵訳『修身論』文部省

1875（明治8）年6月 平野久太郎訳『修身学』西村集太郎

- 13 本論稿では、前掲の佐々木による論文の他に、以下の先行研究を参考にしている。以下、引用する際には、本文中に著者および引用頁をカッコ内に付すこととする。

浅井茂紀「倫理学の語源について—倫理の漢字と西周—」『千葉商大論叢 A 一般教養篇』第11巻 第2号-A, 千葉商科大学国府台学会, 1973（昭和48）年10月, pp.86(1)-51(36).

久野昭『倫理学の概念と形成』以文社, 1977.

子安宣邦「近代『倫理』概念の成立とその行方—漢字論・不可避の他者—」『思想』No.912, 岩波書店, 2000年6月, pp.4-24.

公益財団法人モラルロジー研究所「NEWS No.75『倫理』『道德』という言葉の由来について」2007年4月1日, <http://rc.moralogy.jp/?p=735> (2016年11月1日取得).

相澤伸幸「〈道德〉と〈倫理〉の前提的境界設定に関する教育学的考察」『京都教育大学紀要』No.115, 京都教育大学, 2009年9月, pp.13-26.

西悠哉「『ethics』概念の受容と展開—倫理教科書を中心として—」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第38号, 佛教大学, 2010年3月, pp.39-56.

なお、以下参考として、各論稿に挙げられている英語・ドイツ語に対応する表記および訳語を年代順に整理し挙げることにする。引用元がわかるよう、著者もしくは団体名を各末尾の括弧に付した。

1870（明治3）年 西周『百学連環』において ethics が「名教学」と訳。（浅井）

1873（明治6）年 西周「生性発蘊」において「礼儀の学」と表記。（久野）

- 1873 (明治6) 年10月 保田久成訳『修身学初歩』三報社の「緒言」では、「モラルサイエンス」と音表記。またMoralに「正経の」の訳語。(モラロジー研究所)
- 1874 (明治7) 年 福沢諭吉『学問のすすめ』「八編」に「モラルサイヤンス」と音表記。(モラロジー研究所)
- 1874 (明治7) 年4月～翌年11月までの間に43号まで刊行された『明六雑誌』において、ethicsに相当する語が2か所、moralに関する語が27か所。中村正直が「エチツク」(ethics)を「倫常の道、または修徳の道」さらに「モラル〈倫常の学〉」(11号-3), また「エヂックス」を「人道の学、また修徳の学」(16号-3), さらに「モラル(修身)」(33号-1)と表記。他に、西周が「モラル」(1号-1), 「謨羅爾」(16号-4), 「道徳〈モラル〉」(19号-1)などと表記。(西)
- 1875 (明治8) 年6月 平野久太郎訳『修身学』においてMoralに「徳義ノ」「善悪ノ」の訳語。(モラロジー研究所)
- 1877 (明治10) 年 西周『訳理学説』において「^{モラル}謨羅爾」に「道学」「人道」「道徳之論」, 「^{エチツク}埃智喆」に「彝倫学」「道徳礼儀の学」「倫学」の訳語。(浅井, 久野)
- 1880 (明治13) 年5月 箕作麟祥『文部省百科全書』刊行時の表題“Natural Theology-Ethics”に「自然神教及道徳学」の訳。(久野)
- 1888 (明治21) 年 ケルダーウッド (Henry Calderwood, 1830-1897) *Handbook of Moral Philosophy* (1888) の翻訳として、中村清彦による『珂氏倫理学』の表題。(久野)
- 1888 (明治21) 年 ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) 『改正増補 和英英和 語林集成』丸善商社書店において、Ethicsに「道徳學, 修身學」の訳語。(相澤)
- 14 「倫理学」という訳語を作ったのは、西周であるのか井上哲次郎であるのかはっきりしないところがある。例えば、浅井は「西周 (1829-1897, 文政12-明治30) が、今日の倫理学の訳語を作ったと一般的にいわれている」とし、その根拠として和辻哲郎『日本倫理思想史』(第六編第二章)の「明治八年ごろに哲学, 論理学, 心理学, 倫理学等の西の訳語が定まり」という部分を引用している(浅井, 前掲書, pp.59(28)-58(29))。しかし、その後、西が明治10年に「彝倫学」の訳語を用いていることや、西が「倫理学」と訳した文献が明らかでないことを挙げて和辻に疑問を呈しつつ、「おそらく明治10年から明治14年のどこかの年代で、西周はなんらかの形で、倫理学という文字を筆記し、使用しているのではなかろうかと推測」している(浅井, 前掲書, pp.57(30)-56(31))。一方、久野は、「和辻哲郎は、『日本倫理思想史』(第六編第二章)で、明治八年ごろ、西周が倫理学という訳語を案出したと推定しているが、この推定は無理なようである」と述べ(久野, 前掲書, p.15), 「倫理学」の訳語としての初出を明治14 (1881) 年4月の井上の『哲学字彙』(初版)に見ているようである(久野, 前掲書, pp.22-23)。子安もまた、「新訳語『倫理学』を成立させた井上哲次郎」と述べている(子安, 前掲書, p.5)。
- 15 久野, 前掲書, p.50を参照。残念ながら本稿では詳述する余裕がないが、久野は西田幾多郎の『善の研究』(明治44年)に「大西祝と同様の発想」(p.45)を認め、『善の研究』に「倫理のとらえかたにかかわる根本的な問題」が含まれているとして、先の倫と倫理の区別の問題を指摘している。
- 16 『哲学・思想翻訳語事典』もまた、この後に述べる大西祝による倫理学の定義を取り上げ、「ここには倫理学の『規範学』としての新しい性格が明確に示される」として、「旧来の倫理が既存の人間関係(たとえば五倫)を自明とみなし、その中で伝統的に行われた道を守り続ける、のとは異なり、ここでは倫理は各人の生き方に関わり、さまざまな倫理学説を見通す広い視野の中で、人間としてのなすべきことが探究され、選び取られるのである」と説明している。この記述からは、「学」の探究対象が、伝統的人間関係を前提とする徳やその修養ではなく、西洋近代倫理学の視点を踏まえ、広く「人間としてのなすべきこと」として捉え返されていった経緯が伺える。『哲学・思想翻訳語事典』論創社, 2003, pp.289-290, 「倫理・道徳・エートス」の項を参照。
- 17 この著作はもと東京専門学校(早稲田大学の前身)においてなされた講義録である。久野によれば、明治29年、30年に講じられたとされ、小坂国継編『大西祝選集Ⅲ 倫理学篇』(岩波書店)の略年譜によれば、明治30 (1897) 年にこの講義録が「刊行か」という記述がある。明治36 (1903) 年には『大西博士全集』(全七巻)の刊行が始まり、その第二巻に収められている。

- 18 小坂国継編『大西祝選集Ⅲ 倫理学篇』岩波書店, 2014, p.21.
- 19 井上円了『倫理通論』第1, 2, 普及社, 明治20年, 三〜四頁(国立国会図書館 近代デジタルライブラリー).
- ただし, 表記については子安の前掲書p.8に準じて改めている.
- 20 井上円了『倫理摘要』哲学書院, 明治24 (1891) 年(国立国会図書館 近代デジタルライブラリー)の巻末を参照.
- 21 西村茂樹『日本道德論』岩波書店, 1935年, 「第一段 道德學は現今日本に於て何程大切な者なるか」を参照.
- 22 子安, 前掲書, p.12以降を参照.
- 23 本稿では, 「道德」と「倫理」の異同に焦点を当てたため, 1872(明治5)年の『学制』制定以降の修身教育については論及できなかった。道德教育における「道德」とは何かについて考察するうえで, 「修身」の内容およびその変遷に関する検討は不可欠であり, 今後の課題である。
- 24 すでに千徳が指摘しているように『岩波 哲学・思想事典』の項目には, 「倫理学」はあっても「道德」や「倫理」の項目がない。このこともまた, 「道德」と「倫理」の異同について十分な検討がなされていないことを示しているように思われる。
この件について千徳は, 「日本の伝統文化つまり漢語文化圏において伝統的に形成されてきた漢語としての道德の意味と, ヨーロッパ語におけるそれとの間でのかみ合わせの不具合によって, 事典から道德という語が欠落することが起こったようである」と述べている(千徳, 前掲書, p.1)。本稿の考察を踏まえてその理由を推測するなら, 「道德」と「倫理」は一括りに「倫理学(ethics)」の対象として捉えられることで, その間にある意味的な乖離が看過されただけでなく, 個別の項目として立てられることもなかったということではないだろうか。これははまだ憶測の域を出ない。しかし, 「道德」や「倫理」をどのようなものとしてとらえてきたか, また今後とらえていくかは, 道德教育だけでなく日本の倫理学にとっても重要な課題であると考ええる。
- 25 ここで重要なことは, 後に続けて述べているように, 隔たりに自覚的であるべきだということである。隔たりのあることが問題なのではない。
例えば, 苫野は「そもそも道德とは何か?」という問いに対し, ドイツの哲学者ヘーゲルの「〈自由の相互承認〉の原理」をもって答えているが, 本論の趣旨から重要と思われるのは, こうした答えが日本の道德教育を問う文脈において, 児童生徒の生活の場や学習指導要領と具体的にどのように切り結んでいるのかという点であり, そうした視点から論究することであるように思われる。井藤元編『ワークで学ぶ道德教育』ナカニシヤ出版, 2016所収, 苫野一徳著「第3章 そもそも道德とは何か? 1万年の戦争を経てたどりついた〈自由の相互承認〉という原理」を参照。

引用・参考文献

- 相澤伸幸「〈道德〉と〈倫理〉の前提的境界設定に関する教育学的考察」『京都教育大学紀要』No.115, 京都教育大学, 2009年9月, pp.13-26.
- 赤林朗『入門・医療倫理Ⅰ』勁草書房, 2005.
- 浅井茂紀「倫理学の語源について—倫理の漢字と西周—」『千葉商大論叢A 一般教養篇』第11巻第2号-A, 千葉商科大学国府台学会, 1973(昭和48)年10月, pp.86(1)-51(36).
- アリストテレス『ニコマコス倫理学(上)』岩波書店, 1971.
- 井藤元編『ワークで学ぶ道德教育』ナカニシヤ出版, 2016.
- 押谷由夫『道德教育の理念と実践』一般社団法人 放送大学教育振興会, 2016.
- 『哲学・思想翻訳語事典』論創社, 2003.
- 河野哲也『道德を問い直す—リベラリズムと教育のゆくえ』筑摩書房, 2011.
- 久野昭『倫理学の概念と形成』以文社, 1977.
- 公益財団法人モラロジー研究所「NEWS No.75『倫理』『道德』という言葉の由来について」2007年4月1日, <http://rc.moralogy.jp/?p=735> (2016年11月1日取得).
- 小坂国継編『大西祝選集Ⅲ 倫理学篇』岩波書店, 2014.

子安宣邦「近代『倫理』概念の成立とその行方—漢字論・不可避の他者—」『思想』No.912, 岩波書店, 2000年6月, pp.4-24.

佐々木英夫「倫理という云ふ文字の歴史的研究」『日本大學文學部研究年報』第一輯（復刊號）, 日本大學文學部, 1951.

永井均『子どもための哲学対話』講談社, 1997.

西村茂樹『日本道德論』岩波書店, 1935.

西悠哉「『ethics』概念の受容と展開—倫理教科書を中心として—」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第38号, 佛教大学, 2010年3月, pp.39-56.

藤井剛『第2版 詳説 政治・経済研究』山川出版社, 2010.

諸富祥彦『「問題解決学修」と心理学的「体験学習」による新しい道德授業 エンカウンター, モラルスキル, 問題解決学習など「理論のある面白い道德授業」の提案』図書文化社, 2015.

文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編』平成27（2015）年7月.

文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道德編』平成27（2015）年7月.

※以下, 国立国会図書館 近代デジタルライブラリーより

井上円了『倫理通論』第1, 2, 普及社, 明治20年.

井上円了『倫理摘要』哲学書院, 明治24（1891）年.

井上哲次郎『倫理新説』酒井酒造等, 明治16年.

On the Meaning of “Morality” in Moral Education:
A Comparative Study of “*Doutoku*” (Morals) and
“*Rinri*” (Ethics) in Japanese

KOBAYASHI, Hideki

The purpose of this paper is to reconsider the meaning of “morality” in moral education, in particular through the clarification of the difference between “*Doutoku*” (morals) and “*Rinri*” (ethics) in Japanese. In general, it is said that “*Doutoku*” and “*Rinri*” have the same meaning but, in fact, the difference in their meaning became evident during the process of assimilating Western philosophy and ethics in the Meiji era. Nevertheless, not much attention has been paid to this difference and with little thought being paid to this, discussions on morality go on even now. In this paper, we examine the implication of “*Doutoku*” and “*Rinri*” in Japanese through earlier research on “*Rinri*” and “*Rinri-gaku*” as a translation of the word “ethics”. Clarifying the difference between “*Doutoku*” and “*Rinri*” in Japanese will help us to understand various positions and hidden premises in discussions on morality.